鬼の嫁

おに　よめ

カラー122ページ

ぽんふぁーず

鬼の嫁
来た！
・・・・

おい
鬼火は
どうした
鬼火は
・・・・

お前が
桃太(とうた)じゃな
綱坂・・・
先生？
うむ
綱坂小平じゃ

鎧ヶ淵じゃ

見事じゃろう
わしは桜屋敷と
呼んでおるのじゃがな
皆は
・・・
？

舞・・・
でも
どこか
変だ
鈴鹿
ち
父上
見て
いたのですか
ホッホ
！

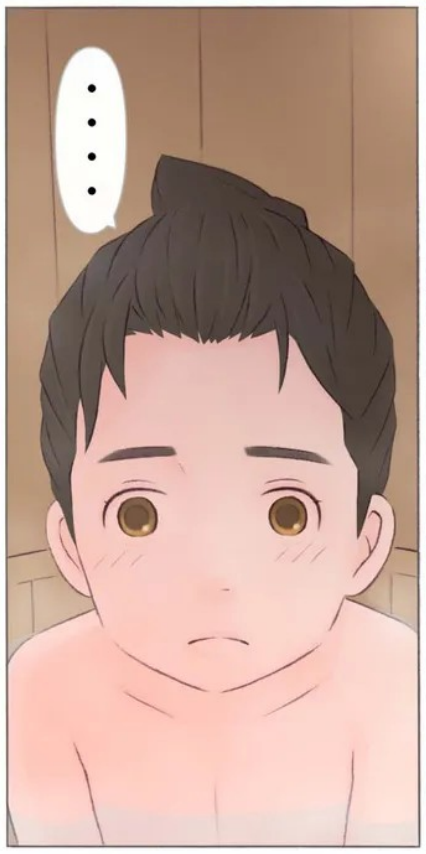
もう
話していたろうが
この子じゃよ
まあ
あなたが
父から
話は聞いていました
あ
か
掛水
桃太
と申します！
桃太
さん
よい
お名前
ございます
あ
ありがとう
さて
今夜も客が来る
桃太にも
働いてもらうぞ

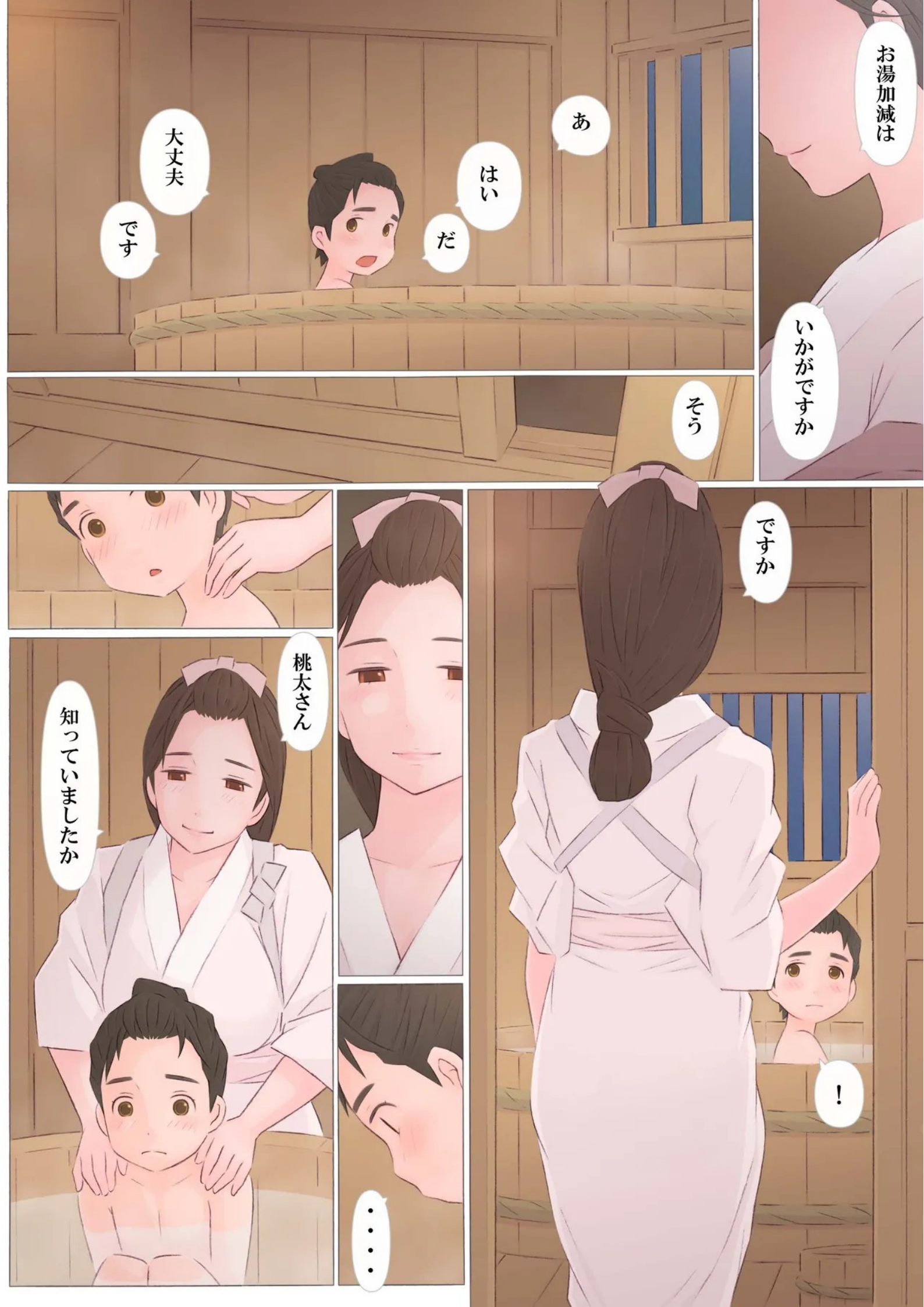
おーい
もっと
湯を足してくれ
はいっ
は

お
来おったわ
聞いたか
京のこと
三郎のことか
ようしてのけたものよ
それよ
相手は確か
土佐の
・・・
うむ
らしいのお
桃太さん

お疲れ様でした
お風呂に
入りませんか

え
あ
はい
・・・


・・・・

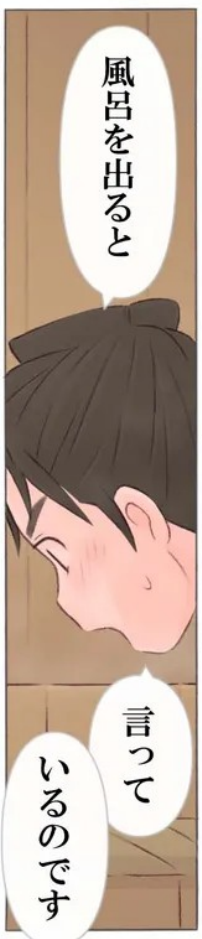

お湯加減は
いかがですか
そう
あ
はい
だ
大丈夫
です
ですか
！
桃太さん
知っていましたか
・・・・

男の体から疲れをとるには
こうして
・・・
女の指で揉みほぐすのが
一番よいのです

！

も
もう
いいです

もう
出ます
から


風呂を出ると
言って
いるのです

はい
わかりました
こっちを向いていますから
どうぞ

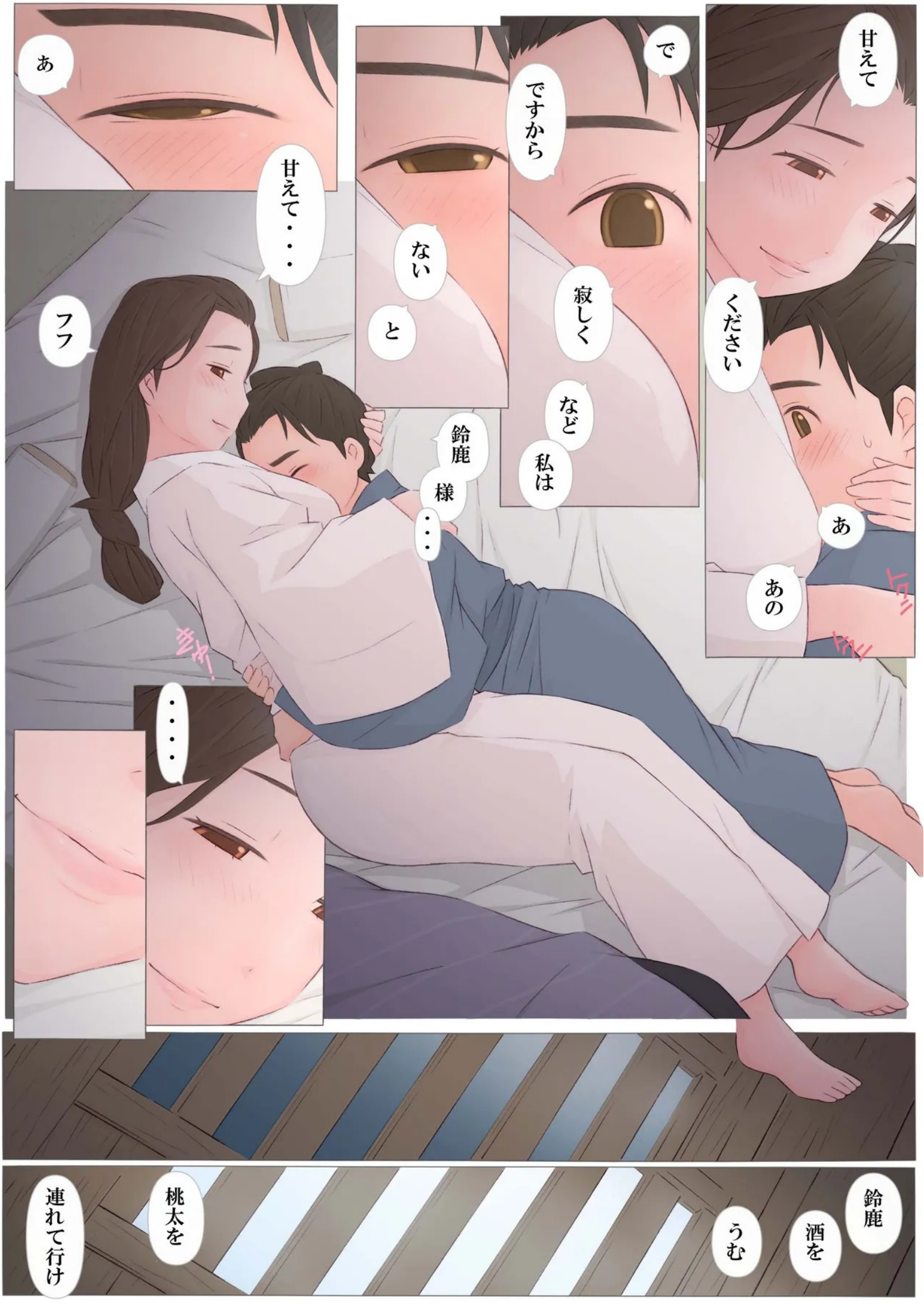
桃太さん
はい

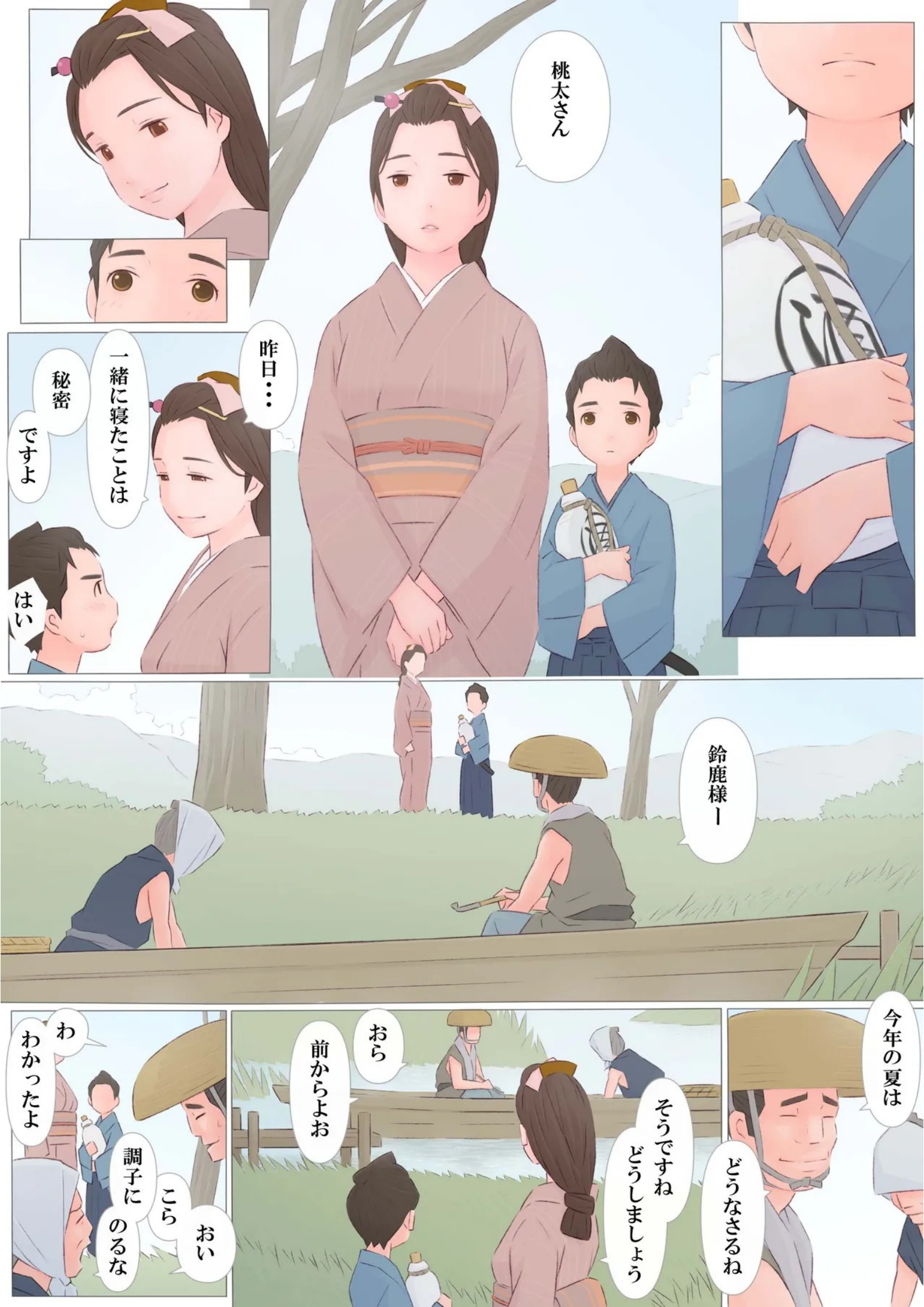
桃太さんのお部屋に案内しますから
待っていてください
あ
はい
！
さ
こちらへ

では
寝ましょうか
はい
・・・・
あの
鈴鹿
様
初めてです
こんなにいい布団は
うわあ

鈴鹿
・・・
様？
はい
寝ましょう
一緒に
桃太さん
桃太さん
寂しくは
ありませんか
・・・・

寂しくは
ない？
平気です
本当に
本当
に？
・・・・
いいんですよ
寂しかったら
鈴鹿に
甘えて
！
ぎゅ！


甘えて
あの
あ
ください
私は
など
寂しく
と
ない
ですから
で
鈴鹿
様・・・
甘えて・・・
フフ
あ
・・・・
連れて行け
桃太を
酒を
うむ
鈴鹿


桃太さん
昨日・・・
一緒に寝たことは
秘密
ですよ
はい
鈴鹿様ー
今年の夏は
どうなさるね
そうですね
どうしましょう
おら
前からよお
おい
こら
調子に
のるな
わ
わかったよ

いやですよ
旦那
そうかい
つれないねえ

まだ
父上が
道場を開いていた頃
桃太さんの
お父上とお母上には
何度もお会いしているのです
・・・そう
だったのですか
はい・・・
桃太さんは
・・・

父は
厳しい人でした
私は
その
・・・
桃太さん
今夜も
一緒に
寝ましょう
はい
・・・
あ
その夜
鈴鹿は
桃太のもとを訪れた
次の日の夜も
その次の日の夜も

桃太も

また

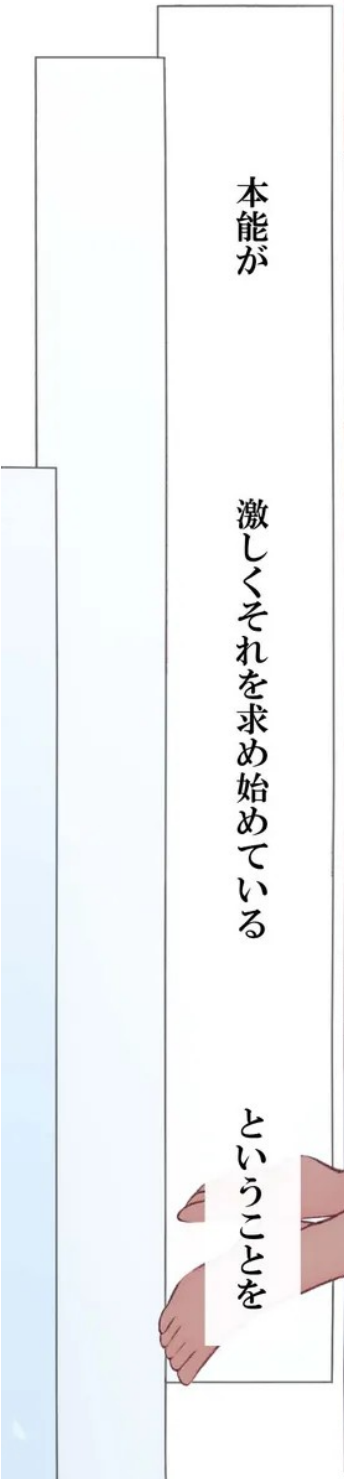
夜を

鈴鹿の訪問を

待ち焦がれるほどに
なっていった
そして
知ったのだ

気が遠くなるような
感覚
・・・

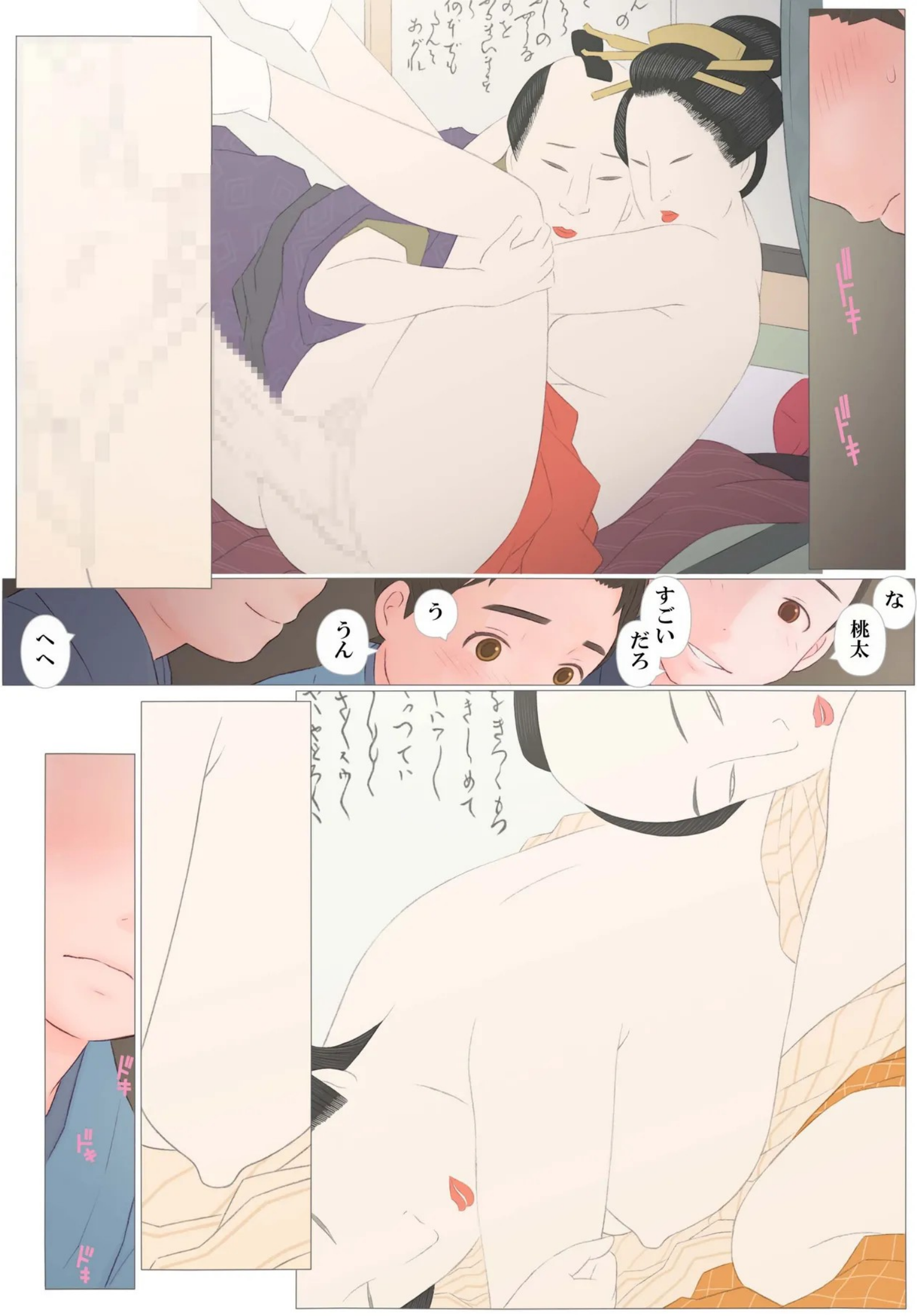
それが
「快感」
というものだと


本能が
激しくそれを求め始めている
ということを

ここだよ
へへ
桃太！
待たせた？
いいから
こっちに
来いよ

約束だからな
見せてやるよ
う
うん
へへ
ほら
どうしたんだよ
日が暮れちまうぞ
わ
わかった

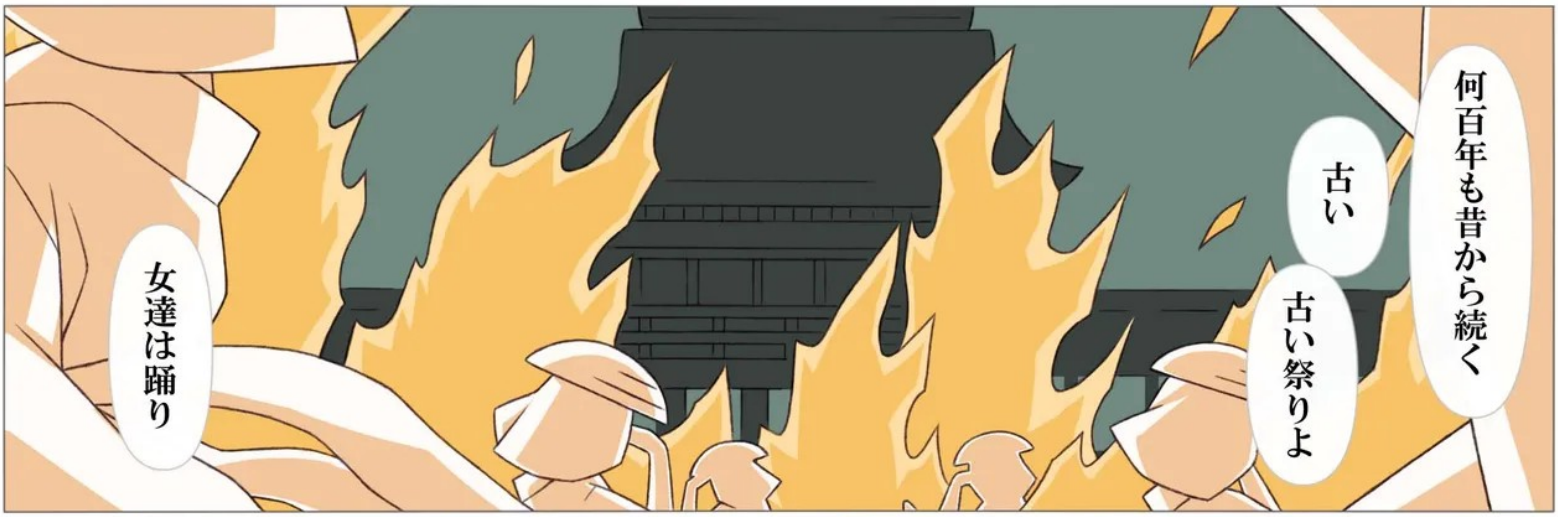
・・・・


ドキ
ドキ
な
桃太
すごい
だろ
う
うん
へへ
ドキ
ドキ
ドキ

なあ
桃太
え
別に
何も
あ・・・
何?
鈴鹿様
いつまで
夏も
ここに・・・
いるのか
?
知らない
けど
・・・
なんで
そんなこと
・・・・
うん
・・・
いや
知らないなら
いい
わかったら
教えてくれよ
な
へへ

・・・・
・・・
さん
！
桃太さん！
・・・桃太さん
私に
何か
御用ですか
待っていて下さい
もう少し
・・・・
いえ
いえ
何でも
ありません

鈴鹿
考えて
くれたか
・・・はい
今しばらくは
こちらに
・・・
お
そうか
ホホ
そうか
よし
あ
あの
先生
なんじゃ
夏に
この村では
何か特別なことが・・・
あるのですか
特別？
祭りのことか
おお
鬼追い
か
まだ
話していなかったか
この村の祭りはな
鬼追い
と
呼ばれておってな


何百年も昔から続く
古い
古い祭りよ
女達は踊り

男達は
鬼となって
女達を追う

そして
気に入った女を
連れ去っていくのよ

連れ・・・
去る?
ホホ
そうじゃよ

鬼に連れ去られた女はな
一晩を
その鬼と共にせねばならん
ホホ
どういう事かわかるかな
わからんか
ホホ

・・・・

もっとも
女達もな
はじめからこのこと
承知しておる
ホホ
じゃからな
男どもはな
落ち着かぬわけよ
身分が違おうが
道から外れて
いようが
・・・
すべてが
許される
笛も歌もいらぬ
・・・
ホホ
おお
そうじゃ
鬼の面なら
ほれ
我が家にも
そこに
・・・・
父上！
父上
起きて・・・
・・・もう
・・・・

ドキ
ドキ
ドキ
ドキ
ドキ
ドキ

・・・だね
本当だね
！
本当に私を
女房にして
くれるんだね？
ああ
もう何としてでも
お前を
堪能し尽くすまで
あ
は
今夜は
離さねえよ
うれしいよ
抜かずに
抜かずに
いかせておくれ

アア
！
イイ
もっと
もっと突いて
私のこと見捨てたら許さないよ
なにを・・・
他のいい男に口説かれたらそっちに転ぶんだろ

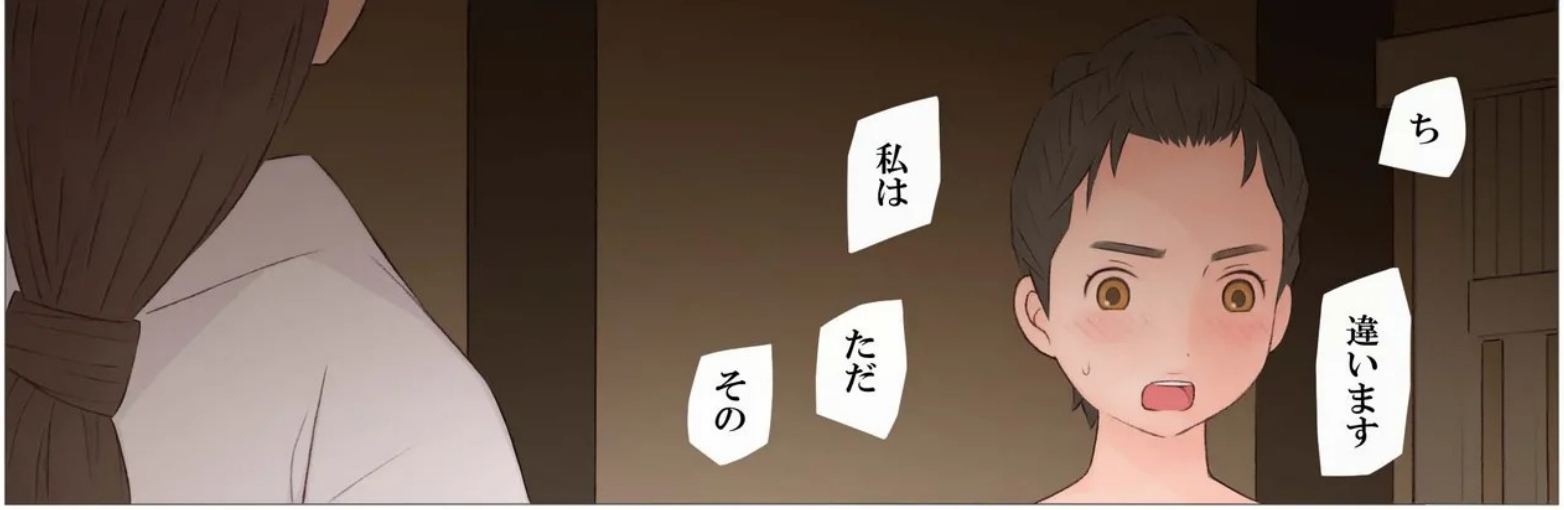
そうだよ悪いかい
サァ
アア
もっと突き立ててておくれよ
イク
イクよ
そうよがれると
オレもガマンできねえ
ダメだよ
休まないで続けておくれよ
ああ
憎らしい
いくぞ
出すぞ
いく
う
小鬼さん

・・・・
どうしてこんな所に
小鬼さんが
いるのかしら
ついてきて
小鬼さん
何をしているの
立ちなさい
早く

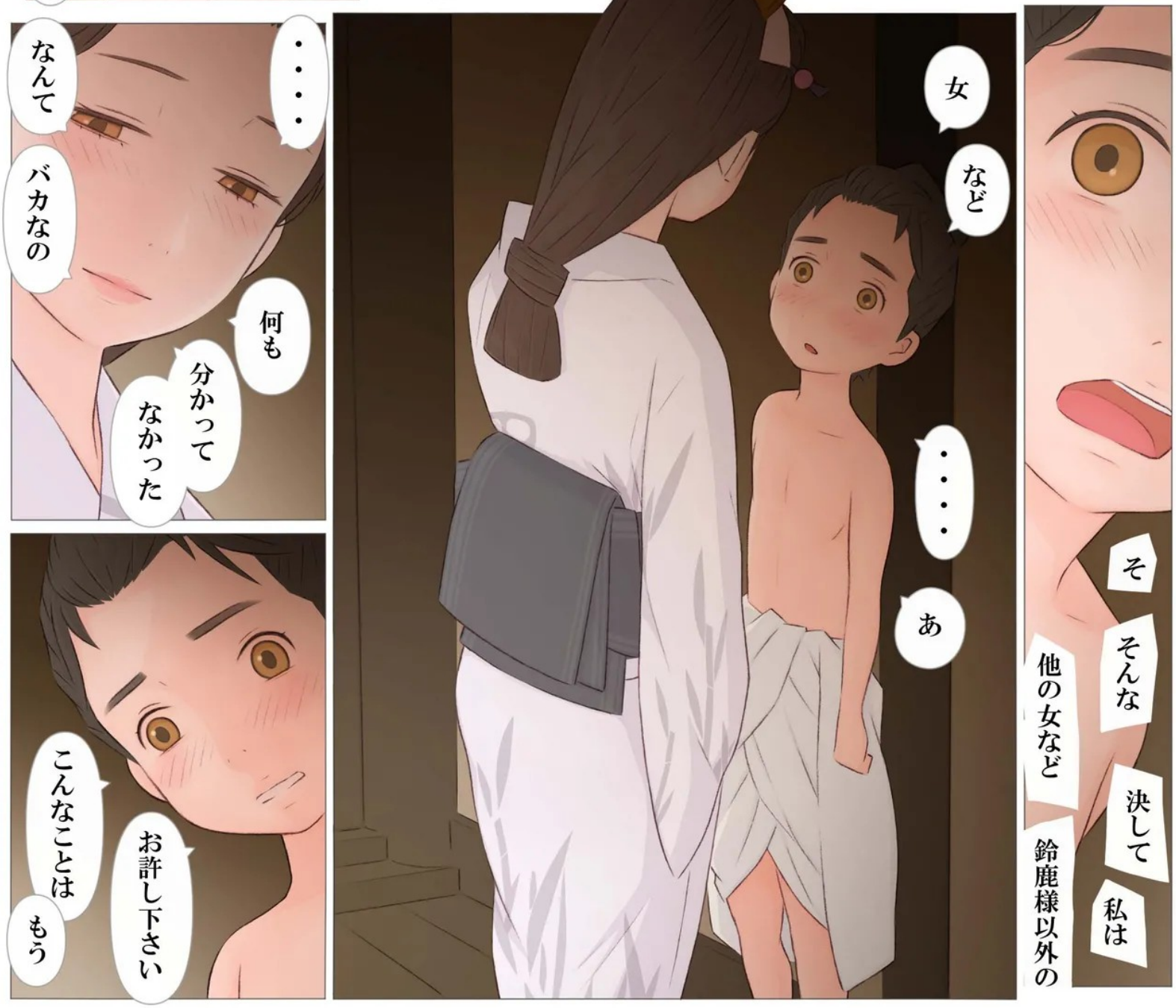
桃太さん

こちらへ

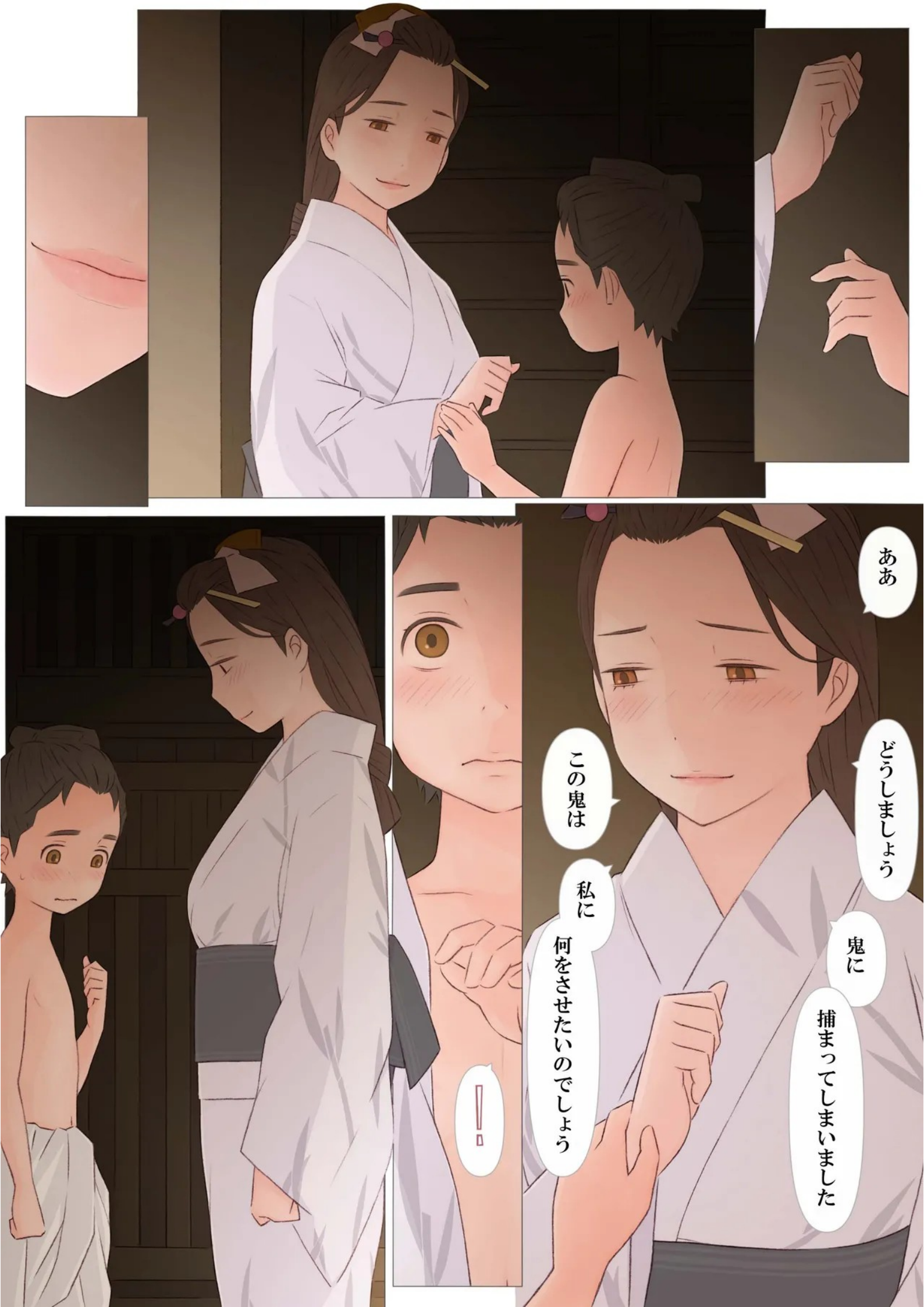
桃太さん
はい
鈴鹿は驚きました
若集入り前の男は
鬼追いに加われぬ掟
その掟を
破るなんて
それほどに
想う女が
いたのですか
・・・・！
そ
それは
その
あ
・・・・
もしや
それは
私？
！


ち
違います
私は
ただ
その

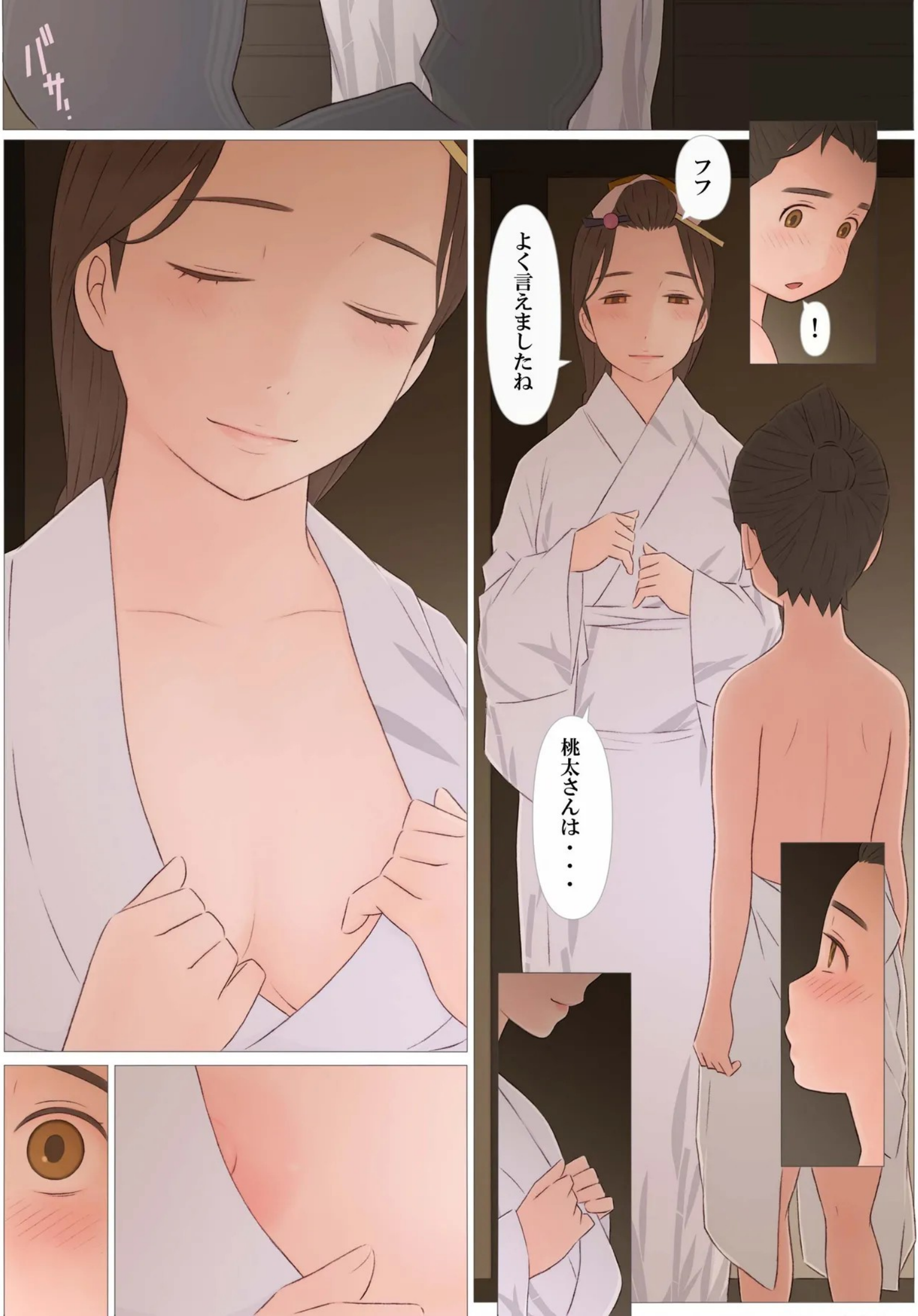
まあ
それでは
女なら
誰でも良かった
のですね
！

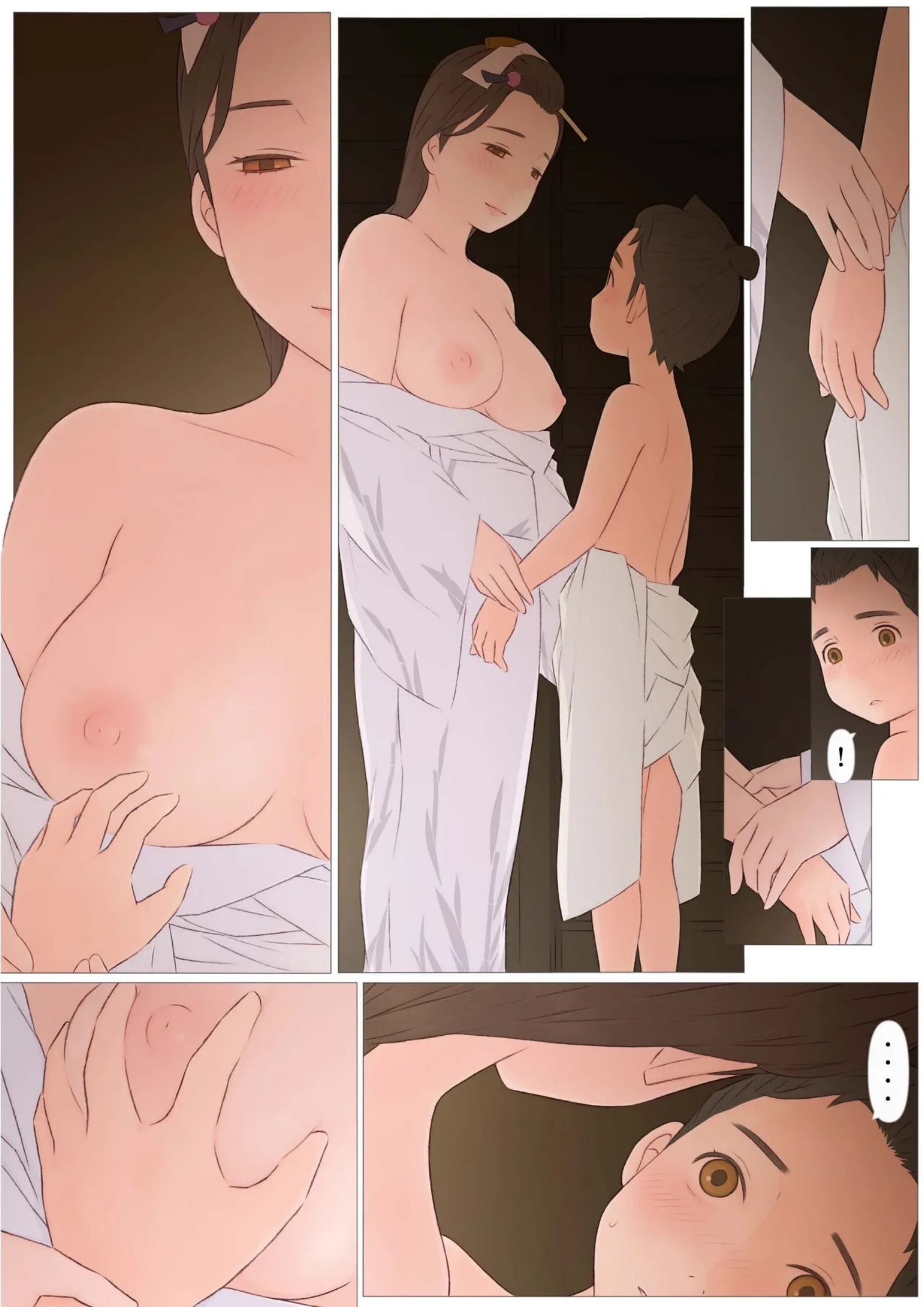

そ
そんな
他の女など
決して
私は
鈴鹿様以外の
女
など
・・・・
あ
・・・・
なんて
バカなの
何も
分かって
なかった
お許し下さい
こんなことは
もう

フフ
フフフ
？
バカなのは私
桃太さんのことを
何もわかっていなかった
私
・・・・
こんな事なら
最初の夜に
桃太さんを
・・・
抱いてしまえば良かった
愛し合って
しまえば良かった
桃太さん
私の手を

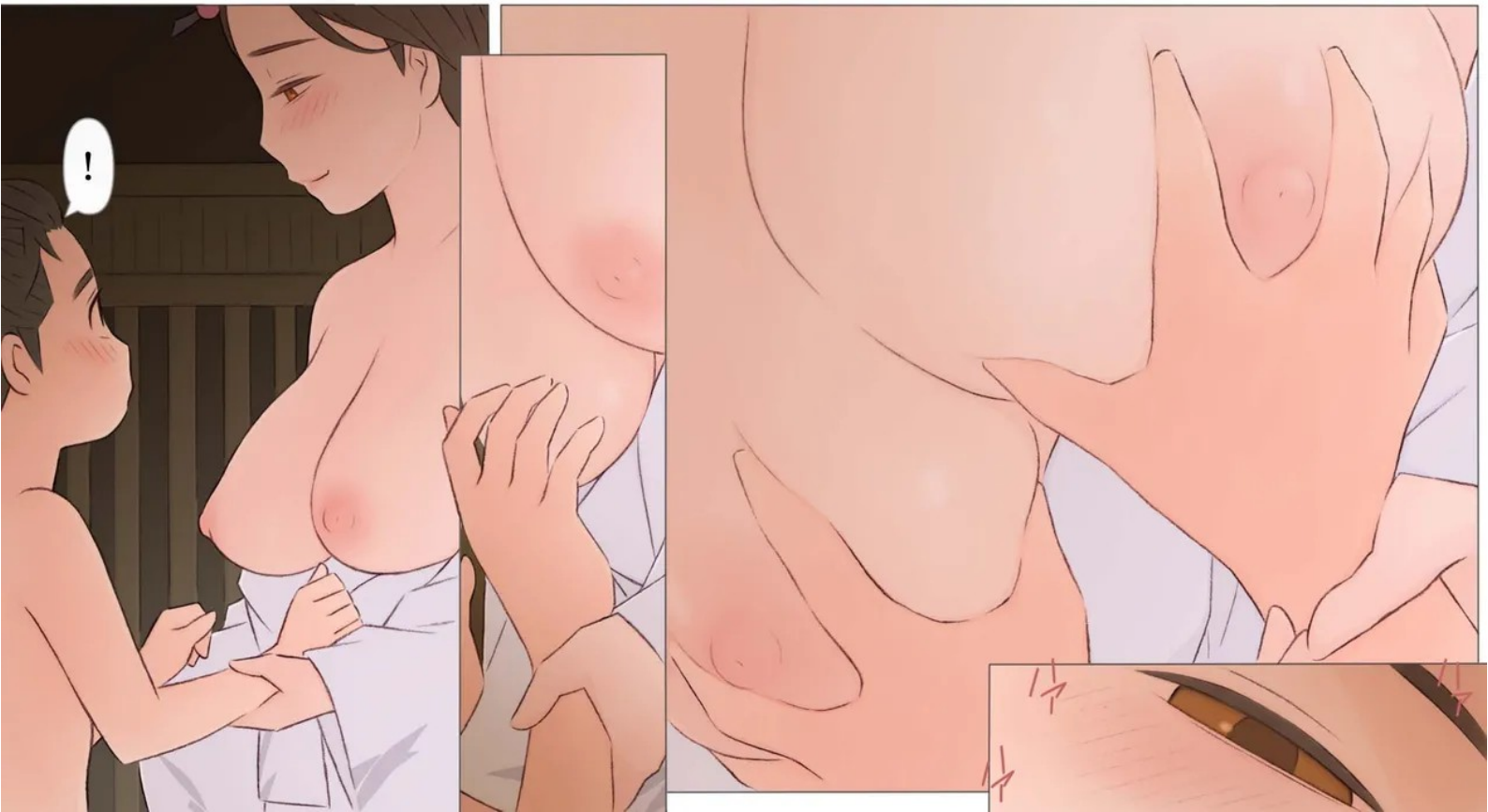

ああ
どうしましょう
鬼に
捕まってしまいました
この鬼は
私に
何をさせたいのでしょう
！

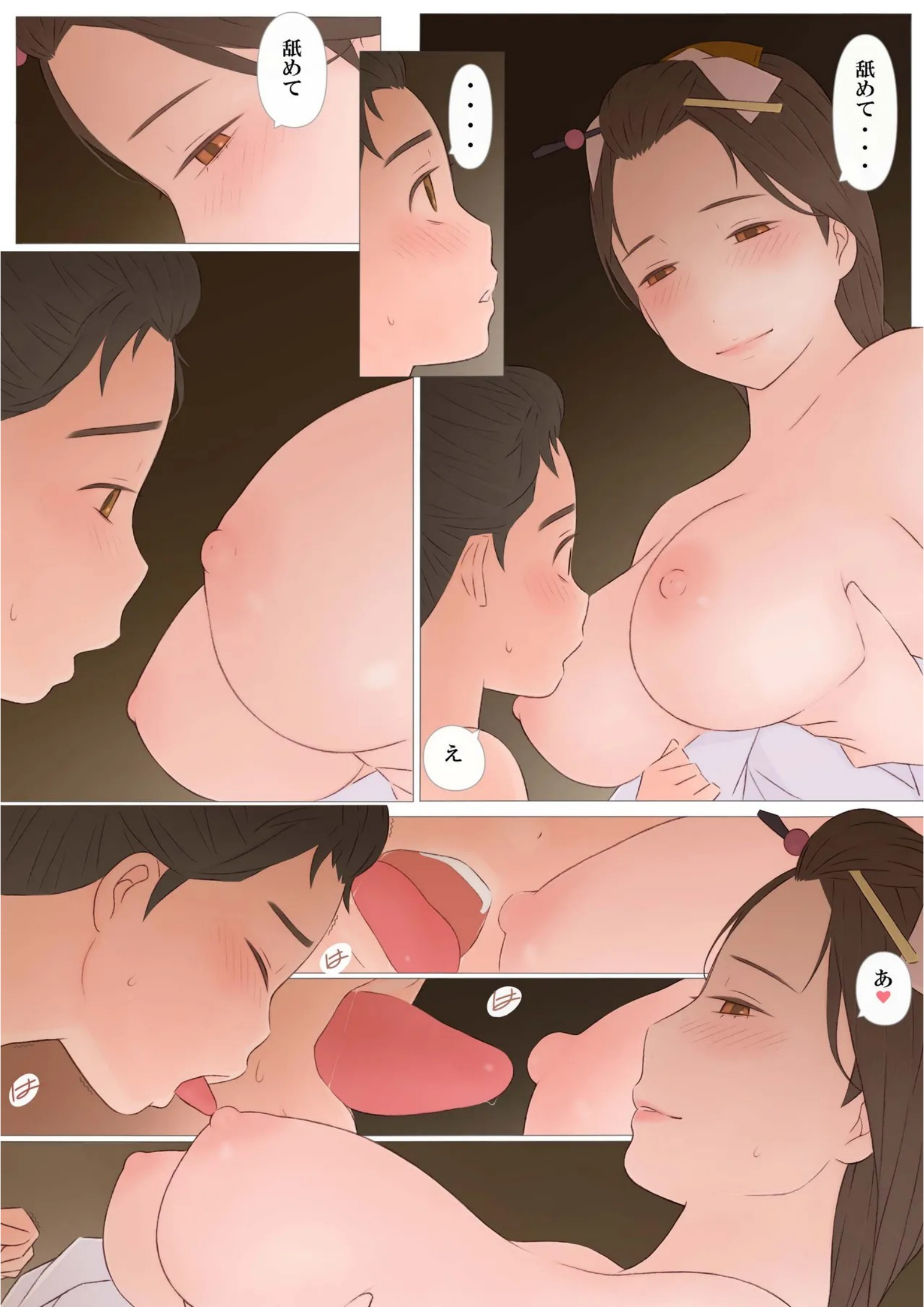
桃太さん
もう
わかっているはず
桃太さんがしたいことと
この鈴鹿がしたいことは
同じです
この鈴鹿を
抱きたいと
鈴鹿と
したい
・・・と
さあ
言って
だ
・・・
し
・・・
し
し
した
して
みたい
です
・・・


バサ…
フフ
よく言えましたね
！
桃太さんは・・・



こうよ
ダメ
もっと強く


！


舐めて
・・・・
舐めて・・・
え
あ♥

フフ
ダメ
ダメ
ダメ
もっと
もっと
はい
は
舐めて
・・・
ほら
あ
そう
そうよ
フフ

こっちも・・・
・・・・
桃太

は
はい
吸って
あ・・・
・・・・
は
ちゅ
あ♡
ぴゃ!

ああ・・・
桃太さん
鈴鹿は
いやらしい女なのです
とても
悪い女なのです
それに比べれば
桃太さんが
掟を破ったことなど
？
フフ
わからない？

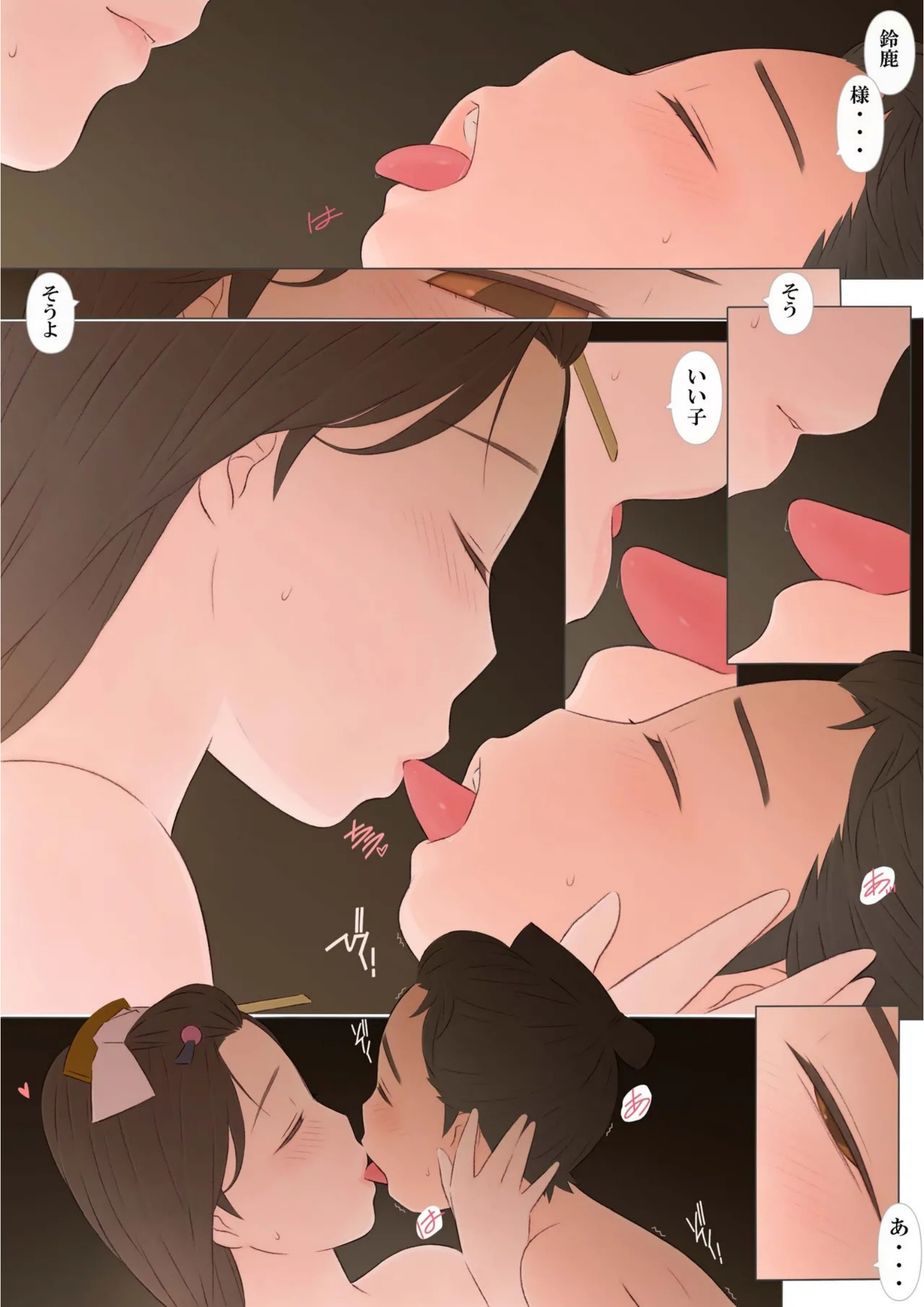
どうして
待てなかったの
？
でも
これで
これで
良かったのかも
しれません
フフ
なんでもない
気にしないで
・・・・
・・・・
あ

あ・・・
少し
興奮してしまって
私
ご
ごめんなさい
・・・・
どうして
謝るのですか
・・・

桃太さん
はい

鈴鹿と・・・
鈴鹿と
口吸いを
しましょう
・・・・
・・・はい

さあ
お口を開けて
舌を出して


鈴鹿
様・・・
そう
いい子
そうよ
あ・・・

ぞっ
鈴鹿様・・・
桃太さん
鈴鹿と・・・
もっと深くて
いやらしい口吸いを
しましょう
・・・・
は
はい
・・・・
はぁ
はぁ
・・・・

桃太さん
鈴鹿は・・・
鈴鹿は
鈴鹿様ぁ
もっと
もっと・・・したい
・・・・
まあ♥
まあ
鈴鹿様ぁ
早く
フフ
焦らないで・・・
鈴鹿様・・・

！
・・・・
あ
あの
す少しだけ
その
気持ちが

あ
ドクン!
ドキ!
・・・・
ドクン
ドキ
ドキ

あ・・・
・・・・
なんと
お顔に似合わぬ
立派なこと

・・・・
あ・・・・

・・・・
ん
は
あっ
あっ
ぴっ
ぴっ
は
フフ
あっ
は
ぴっ

フフ
桃太さん
気持ちいい？
女も乳首を吸うのは好きなのよ
覚えておいて
・・・あ
まあ
元気なこと
こんなにもしっかりと
反り上がって
なんと

鈴鹿様・・・
まだ恥ずかしい？
元気で
威勢がよくって
素敵よ
はい
本当に
素敵

もしや・・・
私と寝ていた時
いつも
こんな風になっていたの
我慢して
いたの
え
そ
それは
我慢
して
ドキ
ドキ
いました
桃太さんは
偉いのね
そう・・・
私には
無理
これほどに良い物を
見てしまったら
舐めたいわ
あ・・・
な
ドキ
舐めて
ください
鈴鹿様
舐めて
ドキ
まあ
桃太さんったら
フフ
ええ
いいわ
舐めて
あげる
あ
ビク
ビク
ビク

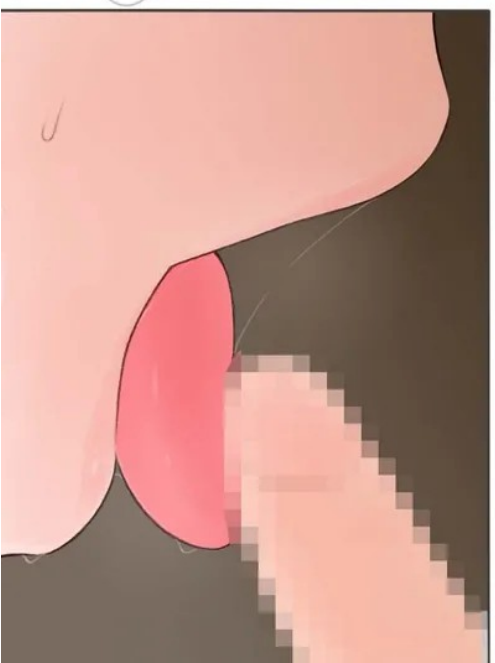
あ
あぁ
桃太さん
ここは？
気持ちいい？
は
はい
いいの？
フフ
これは？
どお？
フフフ

あら
あら
そんな
情けない
お顔をして
可愛いわ
もっと
して欲しい？

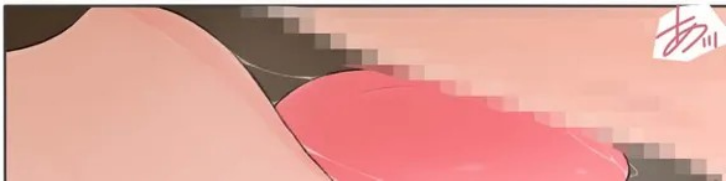
は
あ
はい

どうなの
して欲しいの？

ダメよ
相手に
伝わらないわ
ちゃんと
言わないと



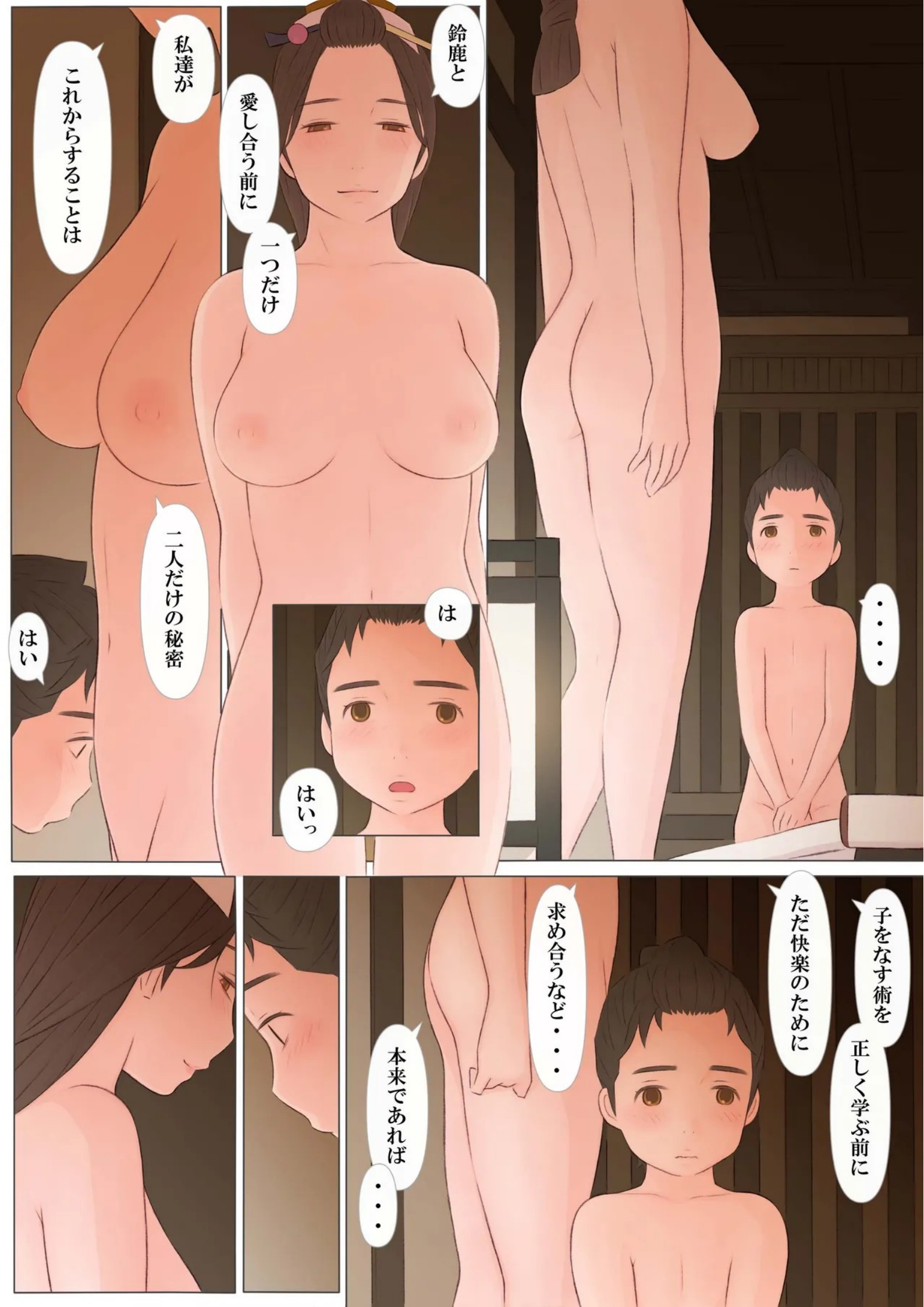
はい
もっと
もっと



あ・・・
フフ
ん・・・
・・・痛い？
い
いえ
大丈夫
あ・・・

ん♡
ん♡
ん♡
ちゅ♡
ぺろ♡
ぺろ♡
あ♡
あ
あ
あ
は
ぺろっ
ん♡
ん♡
…
ちゅるる
あ
あ
あ
あ
はぁ♡
気持ち・・・
良かった?
はい
はいっ
はい
もっと
して欲しい?
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
は
続きは
あちらで
そう・・・
では
フフ

座って
桃太さん
！


鈴鹿と
愛し合う前に
一つだけ
私達が
これからすることは
二人だけの秘密
はい
は
はいっ
・・・・
子をなす術を
正しく学ぶ前に
ただ快楽のために
求め合うなど・・・
本来であれば
・・・

面倒なお話は
これでおしまい
フフ
！

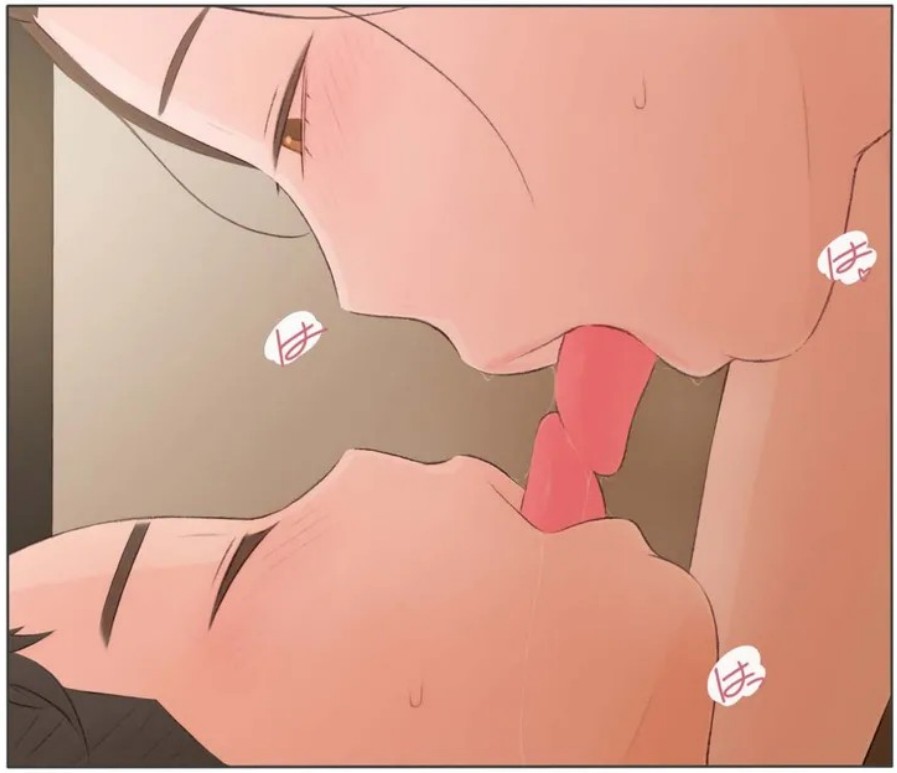
桃太さん
男と女がすることを
どうやって
知ったのですか
お友達と
枕絵でも
見たのかしら
・・・・
・・・はい
そう
です

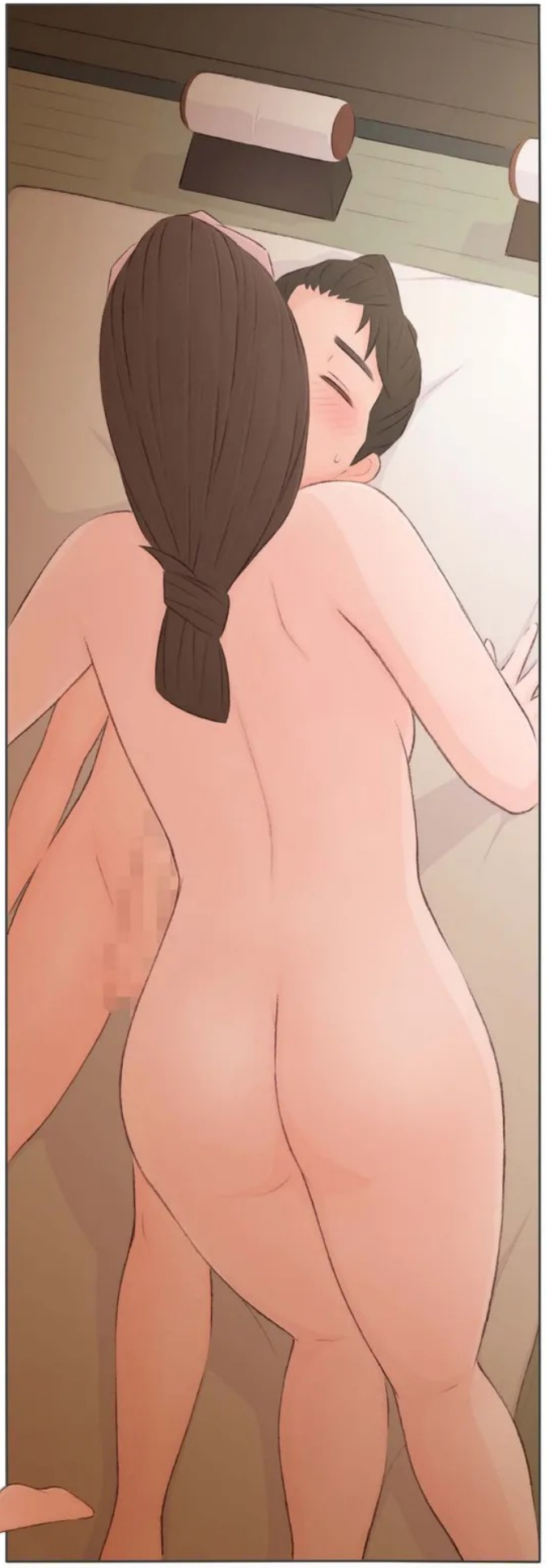
・・・・
ならば
鈴鹿にしたいこと
して欲しいこと
何か
あるのでは
し
したい
こと
・・・・
それは
あ
改めて
そんなことを
言われても
まあ
情けない
そんなことで
どうするのです
桃太さんは
あ
お
お許しください
私は

仕方ないですね
桃太さんは
女と愛し合うのは
これが
初めてですものね
では・・・

鈴鹿が
それで・・・
桃太さんに したいことを
いいですか
します

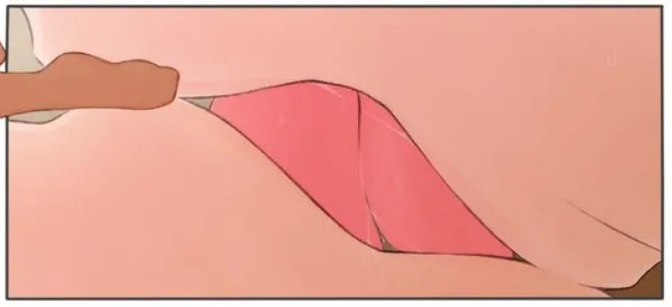
あ
お
お願い
します・・・
まあ
フフ
フフフ


は
は
は



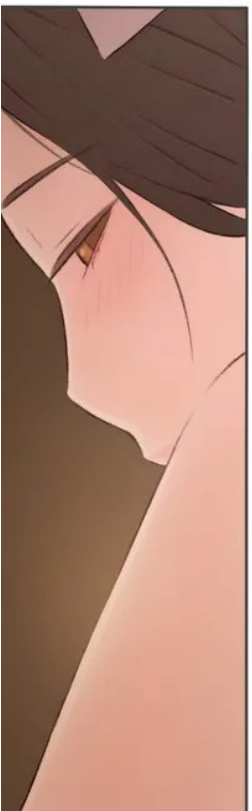
桃太さんは
口吸いが
お好きなようですね
あ
・・・

フフ
私も好き
毎日・・・
しましょう
これから
あ
は
はいっ



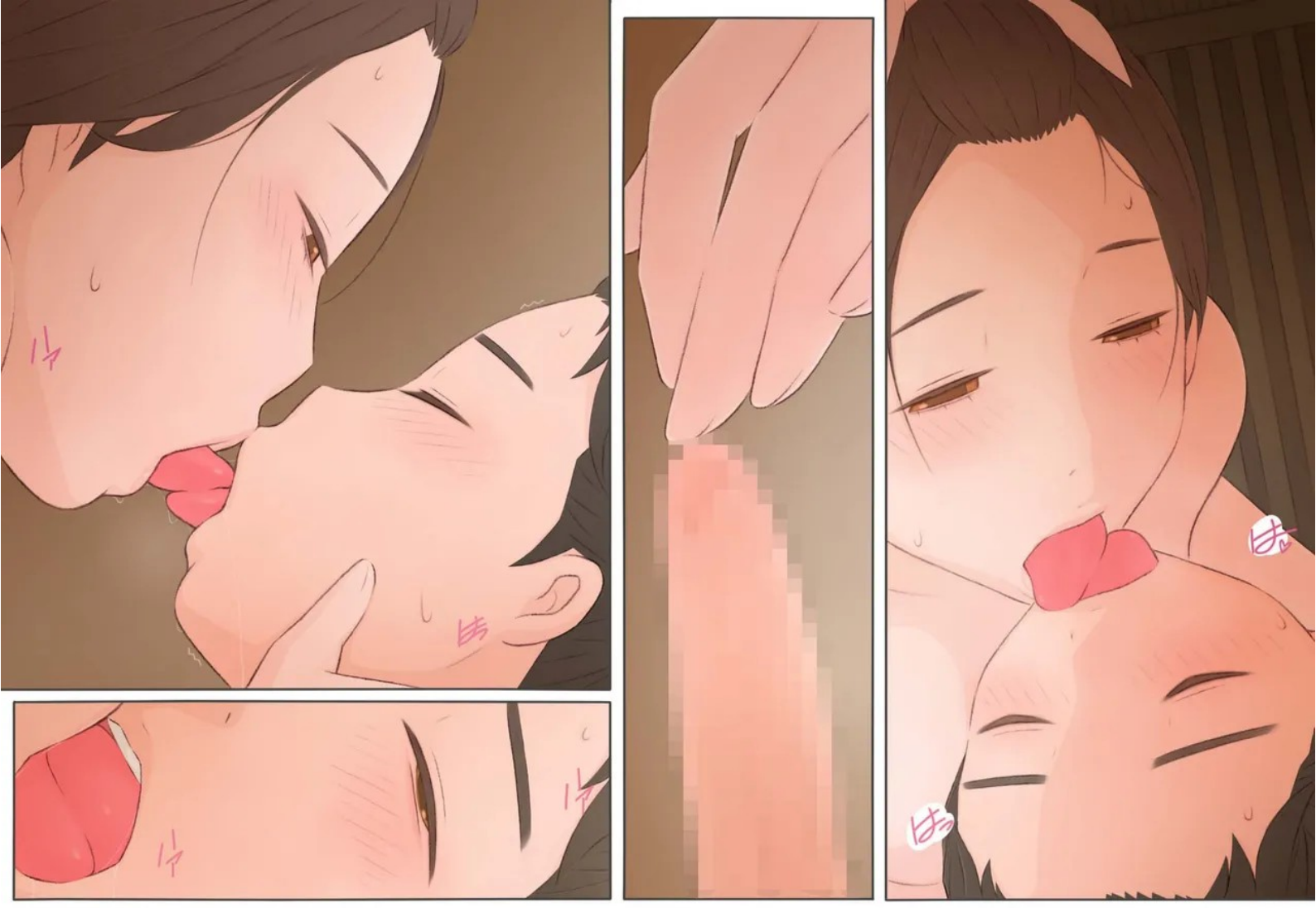
あ

これも
好きでしょ
ほら
あ



好きなだけ
吸っていいのよ
うれしい？
はい
はい

あ
あッ
感じるの？
こんな風に
触れられただけで？
はい
は
あ
桃太さん
もっと舌を
可愛い
そう
鈴鹿様
あ



では
こうしたら？
フフ
どお？
あ
鈴鹿様ぁ
あ・・・

こうなった時
いつも
一人で
していたのね
私のこと
考えながら？
それは
あ
言えないの？
フフ
可愛い・・・
気持ちよく
してあげる

ん
ん・・・
は
は
ビキ
あ・・・
ぷるん
あ
は
あ
ぷるん
ぷる

あ・・・
鈴鹿
様
・・・・ダメ
まだ
ダメよ
もっと
鈴鹿
様
あッ
あ

あ
あ
あ
！
ぴゅっ
・・・・
ハァ
ハァ

ミキ
鈴鹿
様
・・・・
あ・・・

フフ
女にイかされた気持ちは
どう
でしたか
と
とても
良かった
です
フフ
とても?
鈴鹿が
最初の女ですよ
忘れないで
はい
はいっ
絶対に
忘れ
あ

桃太さん
あ
入れます

あ・・・
あ
あっ
・・・入りました

鈴鹿の・・・
女の中です
では
桃太さん
フフ
これが
動きます
ね
あ
あッ
最初は・・・
ゆっくりと
あっ
す
鈴鹿
様

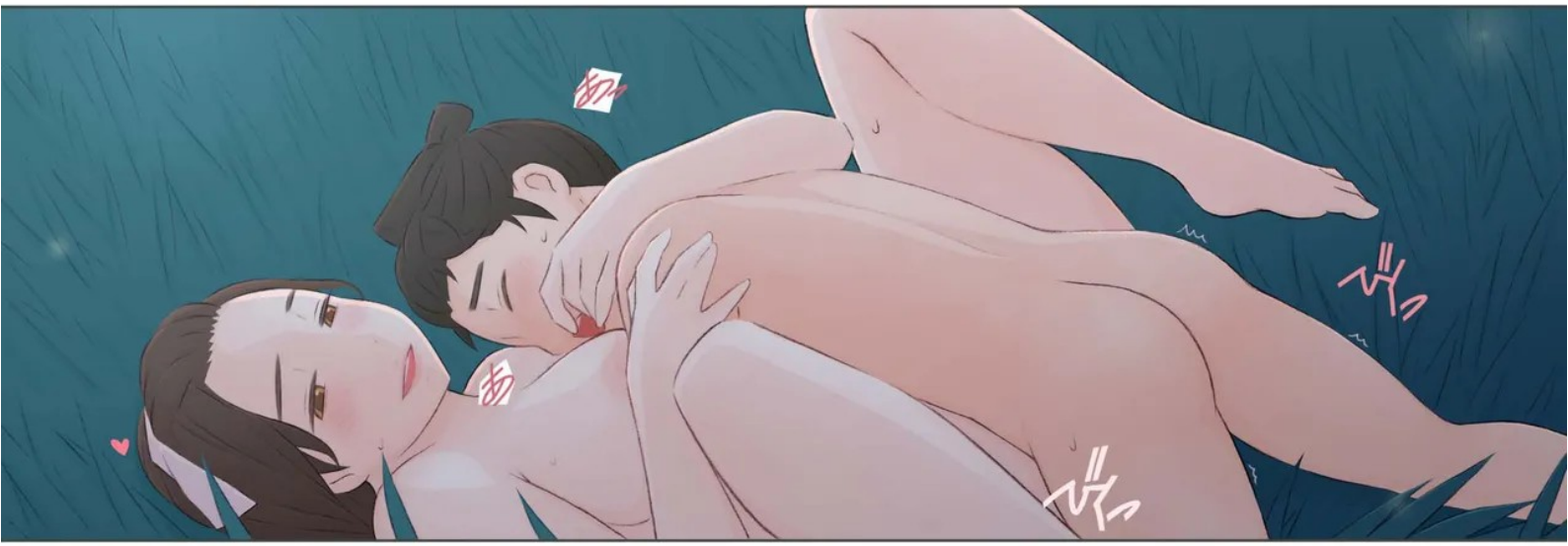
どうですか
桃太さん
気持ちいい？
もっと
激しい方がいい？
これは？
では
あっ
あ
ずっ
ぬちゃ
ぱん
はぁ
はっ
あっ

・・・・
桃太さん
元気が
なくなりましたね
・・・・
鈴鹿の中で
イって欲しかったのに
残念
あ
ご
ごめんなさい
まあ
どうして
謝るの？
こんな事は
よくある事
・・・
はい

仕方がありません
こんな
忙しない所では
ましてや桃太さんは
初めてなのですから
ぬぽっ
あ
次は
夜昼し続けに
思う存分
出来る場所で
・・・・
フフ・・・

女の体が
嫁に行けなかった
鈴鹿様・・・
あっ
鈴鹿様！
フフ
いいの？
こんな
桃太さん
うれしい
でも
今は
ダメ
今なら
一緒に帰れます

あっ
・・・・
仕方のない子
鈴鹿様・・・
さあ
いらっしゃい
焦らないで
ここです
あ
入りましたね
フフ
あ・・・
あ
あ


あ
あ

桃太さん
満足
出来ましたか
ま
まだ
もっと
したい
あ
いけません
ダメ
仕方のない子
もう
どうなっても
・・・
！
・・・・

ここに
いてください
いいですね
はい・・・
何か
恐ろしいことが起きたのだ
桃太は
そう感じた

ご無事で良かった
一人も
もう
大丈夫

逃してはおるまいな
はい
あのような連中を
よこすとはの
わしも
甘かったわ
あり得る事であった
ただ・・・
父上は
もうあの家には
戻って来られません
しかし許せん
逆ろうてみようかの
桃太のこと
「喜んで」
お引き受けいたします
父上
む
許せ
さあ
参りましょう
そろそろ
夜も明けます
のちに桃太は
小平に起きた事
自身の出生
すべてを
知ることになる

それらは

桃太の想像を上回るものではあったが

動揺を誘うものでもなかった

桃太は始めから

小平の事が

苦手だった

最後まで

好きには

なれなかった

やがて

小平のことを

思い出すことすら

なくなっていった

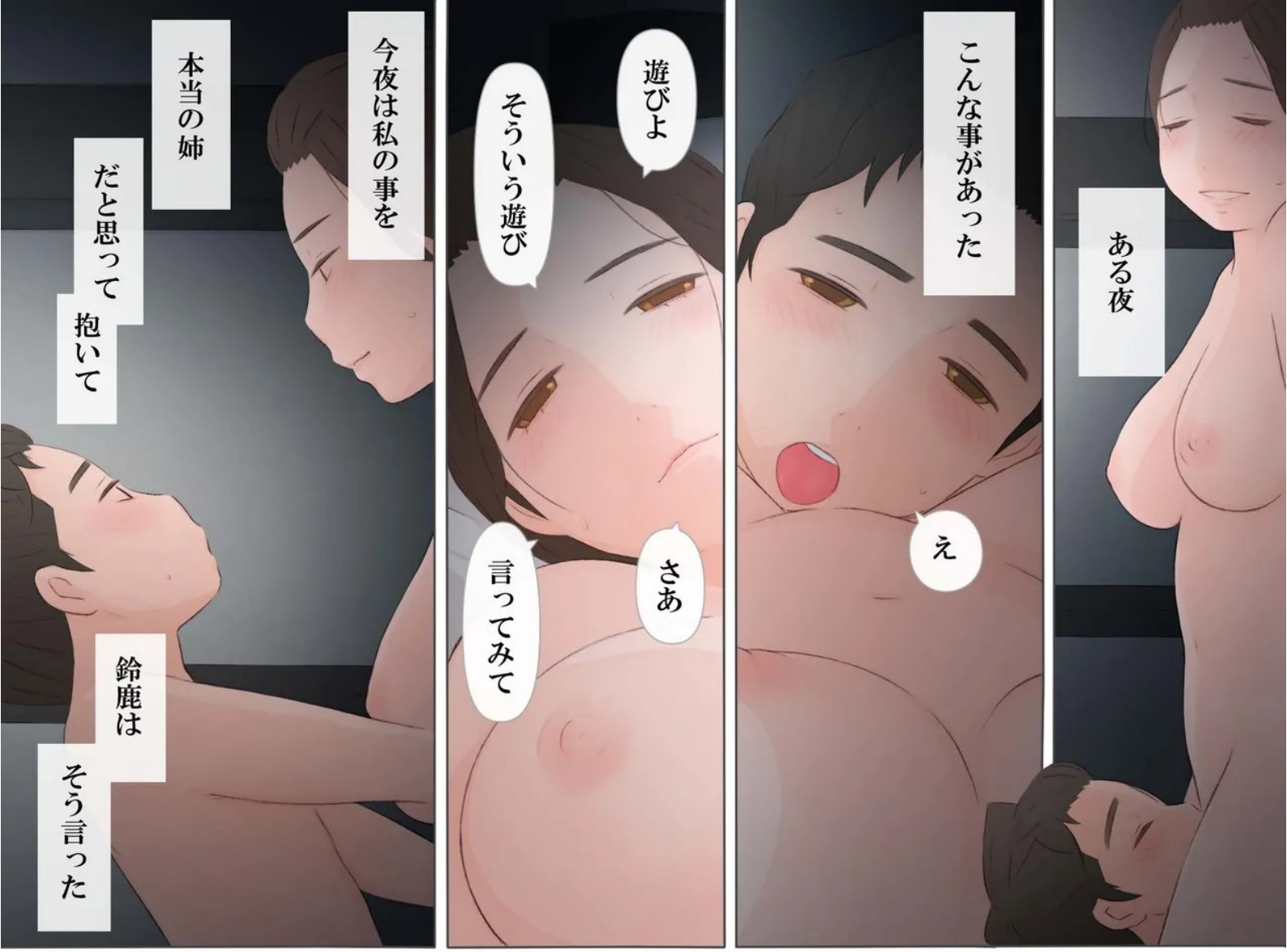
逆に

鈴鹿への愛情は

より激しく

強く

なっていった


ある夜
こんな事があった
え
遊びよ
そういう遊び
さあ
言ってみて
今夜は私の事を
本当の姉
だと思って抱いて
鈴鹿は
そう言った

初めこそ
あ
姉上
姉上
姉上
少し
戸惑ったが
桃太は

激しく
あ
興奮した
おわり

この度は「鬼の嫁」をご購入いただき誠にありがとうございます。

明治時代に盆踊り禁止令なるものが出されてしまうほど、昔の盆踊りでは男女が自由に色々な事をしていたようですね。

ぽんふぁーず